

# 青森市民図書館におけるボランティア活動に関する研究

吉田芽生

## 1. 研究の目的と方法

「ボランティア」という言葉は、17世紀の初頭から「志願兵」という意味で使われ始め、17世紀中ごろから「自由意思にもとづいて、自発的に奉仕活動する人」という意味で使われるようになった(入江 1999)。

現在ではおよそ全国で700万人のボランティアが様々な分野で活動をしているが、本研究で注目したのは図書館におけるボランティア活動である。社会的機能という点からみると、図書館ボランティアは行政の隙間を埋める活動として位置づけられ、「図書館職員ではできないようなさまざまな利用者支援活動により、図書館業務に付加価値をつける(森 2000:144)」という役割を果たしている。図書館ボランティアは活動している人々にとっての生涯学習となる活動であるともいえる。また、無償で活動を行うことがボランティア活動の条件に挙げられてはいるが、「ボランティアが活動するのはある種の『報酬』を求めているからに違いない(金子 1992:150)」と述べ、ボランティアは活動の中から経済的なもの以外の何かを得ていると考える研究者もある。

これらの先行研究をふまえ、本研究では、平成19年度から青森市民図書館において行われている「ライブラリーフレンズ」という名称のボランティア活動を取り上げ、その活動全体の枠組みを知るとともに、個々の活動の実態を明らかにする。このときまず、ボランティア活動はどのように組織化されているか、活動を円滑に進めるためにボランティアに必要とされるスキルは何かに着目する。そして次に「ライブラリーフレンズ」で活動しているボランティアたちに焦点を当て、彼らが活動そのものや、メンバー・利用者との関わりの中から何を求めているのか、そして活動とはボランティアたちにとってどのような「場」であるのかを明らかにする。またそれらの作業を通して、これからのボランティア活動の広がりについて考えることを目的とする。

ライブラリーフレンズは、図書館利用者サービス部会、児童サービス部会、資料整備部会という三つの部会から構成されているが、本研究では図書館利用者サービス部会・児童サービス部会のボランティアを対象に観察調査、聞き取りを行った。聞き取りでは、2つの部会で10人の女性ボランティアから協力を得ることができた。観察、聞き取り調査と並行してボランティア活動に関する文献調査も行った。

## 2. ライブラリーフレンズの活動内容

図書館利用者サービス部会では体の不自由な人への対面朗読と、さわる絵本作りを行っており、児童サービス部会では児童に対する読み聞かせを行っている。

2つの部会はどちらも図書館という行政への協力という形で活動をしている。しか

しその活動は、図書館側からの制限や指示を受けて行われるものではない。例えば、児童への読み聞かせでは読む絵本や紙芝居の選定は、担当ボランティアに任されている。

<Gさんの事例>

G：やっぱり、なんだろうね、自分のやっぱり趣味になっちゃうかなあ。自分の好きなジャンルの本みたいに。私はわりとこう、繰り返し繰り返し出てくる、言葉が出てくるのを結構自分で好きかな、という感じで。

絵本や紙芝居を選ぶときには子供たちが楽しめるようなものを選ぶという前提はあるが、その中から実際に読む一冊を選び出す際には自分が読んでいて楽しいと思えることが基準なようだ。

また、図書館から読むスキルの習得やその向上のための練習を義務づけられているわけではないが、ボランティアが各自で考え、それぞれの方法で練習や勉強を行っている。Cさんの練習・勉強法を例に挙げる。

<Cさんの練習・勉強法>

- ①短歌や俳句に出てくる難しい漢字を覚えるように、短歌や俳句をよく読む
- ②テレビの旅番組のナレーションを見て、間の取り方や読み方を参考にする

ボランティアによる読み聞かせや朗読は専門性を求められる活動ではないため、練習するかしないかは個人の判断に任せられている。しかし、利用者に読んで聞かせる以上は少しでも上手く伝えられるよう、試行錯誤をしながら技術を上げる努力をしていると答えたボランティアは、聞き取り対象者8人中7人にのぼる。

これらのことから、ライブラリーフレンズにおけるスキルの獲得や向上はボランティアの自主性や個人の裁量に委ねられた部分が大きい活動であるといえる。

組織について見てみよう。2つの部会ではどちらもリーダーやサブリーダーなどの役職が決められているが、実際の活動を観察すると、リーダーが一方向的に主導するのではなく、ボランティアそれぞれの自主性が活かされる自由な場になっていることがわかる。例えば、さわる絵本作りの作業においてボランティアたちは賑やかに会話をしながら作業に取り組んでいるが、全員が会話に加わるわけではなく、話したい人は話し、静かに取り組みたい人は会話に加わらない。必要以上に干渉することもなく、各自が自分のペースで作業している。しかし、メンバーの誰かが困り、援助が必要だとわかると、以下の<協力の事例>のようにわからない人や苦手な人に協力するという体制を自然にとっている。

<協力の事例>

Bさんは、カーボン紙を使って黒い布に絵本の型紙を写そうとしていた。しかし何度試しても上手く写すことができず、困っている様子だった。そこでBさんは、隣の席に座っていたFさんに、「どうやって写すんだっけ」と相談をした。Bさんの相談に対してFさんは自分の作業の手を止めて、Bさんと同じ方法で試してみるが、やはりうまくいかない様子だった。さらにそこでFさんが隣にいたOさんに相談すると、OさんもBさんのところに来て試してくれた。

この事例は、最終的に「直接型紙をカットしてチャコペンでなぞってみたら」というFさんのアドバイスにより解決した。相談を持ちかけられた人もわからない場合、「わからない」と言って終わるのではなく解決できるようにさらに他の人にも聞いている。そしてそれでも解決できないというときも、何か方法はないかと考えることで、今までとは別の方法をとるという解決策を見つけることができた。

また、ある人が絵本に使う素材などのアイデアを出すと、他の人がそれを膨らませて形にするなど、自由な活動体制であっても活動の質が低くなるわけではない。むしろそれぞれが強制されず、自分で考え自分のペースで活動できる環境があるからこそ、活動全体の質を向上させることができる。



写真1 さわる絵本作りの作業風景



写真2 さわる絵本ともとの絵本(平成22年度作製)

### 3. ボランティア活動という場

ボランティアたちは活動をする上で様々な人たちと関わり合っている。図書館職員、利用者、メンバーとの関わりがあるが、中でも興味深いのは共に活動しているメンバー同士の関わりが、「ここだけ」のものであるということだ。特に、図書館利用者サービス部会では、毎週一回決まった日に集まっているのにもかかわらず、その関係は活動の中だけでとまっている。ボランティアたちはお互いが過去にどんな仕事をしてきたかなど、プライベートな話をあまりしないという。ボランティア活動はメンバー同士が親密な関係を結ぶ契機になっていないのだろうか。

親密な関係について、アーヴィング・ゴッフマンは次のように述べている。「行為者

が受容者の通常の個人的領域への侵害についてなんの配慮を示す必要もなく、また、そのプライバシーに侵入することで相手を汚染することになんの危惧を懐く必要もない場合には、われわれは、行為者が受容者と親密な関係にあるという。行為者が受容者に近づくさいに注意を払わねばならない場合、われわれは疎遠あるいは尊敬という言葉を使う。(アーヴィング・ゴッフマン 1986:59)」。この言及をもとに考えると、ボランティアたちが活動を通して親密な関係になっているとはいえないようだ。

しかし、筆者が観察したところによると、メンバー同士は相手のプライバシーにお互いが入れない「疎遠」な関係なのではなく、あえてプライベートな話をしないことが、円滑なボランティア活動に結びついているとも考えられる。

ここではボランティア活動歴が短くても、活動の仕方やスキルの向上などについて熟練した人から指示や強制を受けることなく、自発的に関わることができる一方で、困ったときには年齢や前歴に関わらず他のメンバーに助言を求めることができる。図書館ボランティアの外部での生活における地位や役割をボランティア活動に持ち込まず、「ここだけ」の関係でいることによって、ボランティア活動の場でのお互いの関係や役割は、活動そのものとそれへの関わり方を中心に形成される。自分の職歴などに関わらず、ボランティア活動の場において見えるお互いの能力や心遣いが、メンバー同士の関係を作る。「色んな人のいいところを吸収できる。」「勉強になる。」というような語りもあり、それはゴッフマンの言う「尊敬」し合う関係に近いとも考えられる。それによって活動が規律され、まとまりのある活動を続けていくことができるのだろう。このような関係を保つことが、メンバーの自由な活動を守りながら、活動全体の質を高める結果につながっていると考えられる。

ボランティアたちは活動そのものだけではなく、活動の過程で関わる人たちとのやりとりを通じて、日常生活だけでは知り得なかったことや人々と出会い、世界を広げることができる。ライブラリーフレンズのボランティアたちにとってボランティア活動とは、社会の役に立つことができる場所であることはもちろんであるが、それ以上に日常生活をより豊かにするための場となっている。

#### 4. 考察

ライブラリーフレンズの活動を通してボランティアについて考えるうえで注目したいことは、ボランティア活動の広がりについてである。

田中(1998)は、ボランティア活動を”個人系”と”社会系”という二つの傾向に分類した。”個人系”は自己満足に留まる活動であり、”社会系”は社会的な課題を解決するための活動であることから、これからは”社会系”としての活動が望ましいとされてきた。ライブラリーフレンズの活動は”個人系”としての性格が強いと考えられるが、そうだからこそ自由で柔軟な活動が可能になっていることはすでに検討したとおりである。また、ボランティアの中にも対面朗読に関して「どうすれば多くの人に朗読する機会を設ける

ことができるのか」と思っている人がおり、さわる絵本も「もっと多くの人に絵本に触れてほしいと思っているが、よい方法が見つからない」と思っている人がいる。初めは自分の楽しみや興味のために”個人系”から始めた活動でも、活動を続けていくうちに様々な課題が見えてきて、それを改善しようと”社会系”の方向へ向かう気持ちが出てくるようだ。

このように、個人の想いを軸としたボランティア活動であっても、同時に社会に開けた活動へ広がる可能性もある。これからのボランティアとは一つの型に分類されるのではなく、”個人系”と”社会系”という二つの特徴をうまく融合していく形もあるといえるだろう。

<参考・引用文献、URL一覧(この要旨で引用した文献のみ記載)>

- ①アーヴィング・ゴッフマン 1986『儀礼としての相互行為』財団法人法政大学出版局
- ②入江幸男 1999「I ボランティアに関する基本的諸問題 1 ボランティアの思想」  
内海成治 入江幸男 水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社
- ③金子郁容 1992 『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波新書
- ④田中尚輝 1998『ボランティアの時代 NPO が社会を変える』岩波書店
- ⑤森茜 2000「第4章 図書館ボランティア」図書館ボランティア研究会編『図書館ボランティア』丸善株式会社